

---

# 凡才は天使の翼で高く舞う

葵ふうた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

凡才は天使の翼で高く舞う

### 【Nコード】

N7656Z

### 【作者名】

葵ふうた

### 【あらすじ】

とある音楽科。凡才の少年の勝手な挫折と、勝手な再生のお話。ファンタジーな意味での天使は出てきません。

20 x x . 5 . 1 5

1 4 : 2 2 専攻実技

空が高い。相変わらず。

だから夏は好きだ。

頭が来るほどに燦々と輝く空を、いつも通り見上げていた。

「あ」

その音が耳に入るまでは。

「マジ。か……」

音楽室にいるクラス全員が、センセも含めた全員が蕩けた顔で聞き惚れる。

ああ、そんな事はいつもの事だ。

俺命名、【完璧超人】は伊達じゃない。

彼女 高久舞の音に聞き入るなんて、音楽の耳を持つてる奴なら誰だって。

だから教室中、息すら控えて、囚われる、この時間はいつも通り。聴衆の心を奪うなんて、アイツなら朝飯前。

「……最悪」

朝飯前、当たり前の事実。

そんじょそこらのコンクールなら確実に第一位を取ってくる奴だ

から。

けど違う。

これは、違う。

この音は彼女じゃない。

誰が、何人気付いたかは知らないが。

耳が。意識が、舞の音に惹きつけられる。

揺さぶられた頭から胸にと落ちて、心が勝手に躍っていく。

震える心、彼女が一つ音を奏でる度に、打ち震える。

そして同時に、その心が軋みを挙げて泣き叫ぶ。

なんで自分はああじゃない。

技術か、才能か、心構えか、それともただの思い違いか。

演奏に没頭する彼女の横顔が、やけに眩しい。

負けないと思っていた。

なのに。

「何だよ、これ」

確かに彼女の音は胸が躍った。

確かに彼女の音にときめいた。

確かに彼女の音の響きに憧れた。

だから、違うと断言出来る。

舞の音に、こんなに劣等感を苛まればしなかった。

胸の内に広がるのは焼け付くほどの焦燥。

何故か、頭よりも先に身体が泣き出したいほどに理解する。

自分は。

目の前でピアノ奏でる女子生徒の足元にも及ばない。

「あ……………」

ささやかに在ったはずの自信。

ガラスが派手に砕け散る幻聴を聞いた。

アレには敵わない。

ホンモノには決して届かない。諦めると悪魔がのたまう。

普通、こういう場合に自分を励ますだろう、聞こえるはずの天使はいない。

盛大に高らかに嘲りの笑い声。

やるだけ無駄だよ才能が違うそもそも生まれた環境が違うんだから親兄弟親戚一同全てが全てエリート一家な高久家。敵いっこない敵わなくても恥じゃないああいう人間は一握り、音楽だけで食っていける人間の音なんだから気にすることは無い。

耳元で舌なめずりをしながら悪魔。

そうなのかもしれない。

負けを認める自分が悔しくて、そう思う自分が情けなくて。

気付けば痛みすら忘れて唇を噛み締めていた。

指を這わせば、小さな朱色が指に移る。

「伊藤くん、大丈夫？」

気付けば演奏は終わっていて。

立ち上がった彼女が気遣う視線を向けていた。

心の底からその視線が、煩わしい。

そうやって何も知らず、凡才の気持ちなんて欠片も知らず。

「あー……………うん、平気。センセ、すんません。ちょっと陣痛がやっ

て来たんで保健室行ってきます」

無様。

八つ当たり以外の何物でもない事にそこまで考えてやっと気付く。だから道化した台詞。十八年も生きてれば、汚い泥を隠す仮面なんてすぐ被れる。

へらへらと笑っていれば、嫉妬うあ汚いだけの心も薄れていく。だから今は笑っていよう、けれどこの部屋からは逃げ出して。

「……今度の子供は何人目だっけ？ 保健委員の付き添いはいらな  
いわよね」

「あはん、ほら。ボクってば来る者は拒まずですから」

日頃の行いか先生は快く俺を送り出した。

防音仕様の重い扉を開いて、誰もいない廊下にただ一人。

彼女の音の余韻が残ったあの場には、もう一秒だって居たくない。

その日、その後屋上で見上げた空は。  
妙に低くて褪せていた。

一年半後。 12/24

15:53 冬期休業中、自主練習。

空が冴えている。相変わらず。

だから冬は好きだ。

寒さに輪郭を鮮明にする空を、いつも通り見上げていた。

「あ」

その音が耳に入るまでは。

第二音楽室から微かに漏れて聞こえてくる旋律。

誰かは見えない、見えるわけがない。

「相変わらず ……」

けれどそれは違えようのない旋律。

奏でるのは恐らくきつと絶対に、高久舞。

校舎にいる全員が、センセも含めた全員が。蕩けた顔で聞き惚れる姿が目に見えるよう。

ああ、そんな事はいつもの事だ。

本人は嫌がるけれど、【完璧超人】は伊達じゃない。

彼女の音に聞き入るなんて、音楽の耳を持たない人間だって誰だつて。

だから学校中が、自分の演奏すらも控えるこの時間はいつも通り。聴衆の心を奪うなんて、彼女なら朝飯前。

「いい音だ」

朝飯前、当たり前的事实。

そんじょそこらのコンクールなら確実に第一位を取ってくる奴だもの。

これがそう。

これこそが高久舞。

この音でなければ。人々を魅了しなければ、彼女は彼女たりえな

い。

誰が、何人そう思っているかは知らないけれど。思わず綻ぶ頬を抑えて、微かな旋律に耳を傾ける。耳が音に惹きつけられる。

揺さぶられた頭から胸にと落ちて、心が勝手に躍らされる。震える心が、彼女が一つ音を奏でる度に嬉しさに打ち震える。そして同時に、その心が歓喜を挙げて俺に命じる。

超えろ、あの音を何としてでも超えろ。

技術か才能か心構えか、それともただの思い違いか。演奏に没頭する彼女の横顔はきつと眩しい。それでもその輝きに逃げる事はしない。これは確定事項。

「くっそ。ああ。まだ、届かないなあ」

彼女の音は確かに胸が躍る。

彼女の音には確かにときめく。

彼女の音の響きにどうしようもなく憧れる。

だから、負けない。

高久が、例え至高に辿り着いても。もう悩まない。

胸の内に広がるのは暖かな女性の輪郭。

当然のように。頭よりも先に、身体が笑い出したいほどに理解する。

自分は自分の為に、それにきつと少しがさつで口の悪い彼女の為に。

「ん……………」



ささやかに、けれど確かに存在する自信はそれだけで温かく満たされる。

アレには未だ敵わないけれど。

彼女はホンモノ。ならアンタもホンモノになればいい諦めんなと天使がのたまう。

普段、聞こえるはずの悪魔がない。

高らかに、けれど優しく響く声の音色。

無駄だつていいじゃない才能がなんだ私は正孝の音が好き。貴方の音が好き。奏でる、誰もが明るくなれる陽気な音が好きです、私には、届いてます。

耳元で抱き締めて囁きながら、天使。

そう。迷わないと、負けはしないと誓ったから。

負けを認める自分は自分じゃなくて、そう思う自分はきっと天使が蹴飛ばすだろうから。

気付けば綻ぶ頬は笑みの形に変わっていた。指を這わせば、弧を描く口の端が分かる。

「伊藤先輩、大丈夫ですか？」

気付けば演奏は終わっていて。

目の前にはクラスも学年も違う自分の中で散々喚いた天使が訝しむ視線を向けていた。

心の底からその視線が、心を攪る。

そうやって何も知らず、凡才の気持ちなんて欠片も知らず。

「あー……うん、平気。どした、こんな所に？　ちゅーしたくなっ  
た？」

笑顔。

俺が天使と定めた女。やっと、今日という日に、デートに連れ出す事に成功した女子生徒。

だから道化した台詞。十八年も生きてればホントの想いを隠す仮面なんてすぐ被れる。

へらへらと笑っていれば、頬が赤く染まるほどの自分の感情も薄れていく。

だから今は笑っていよう、けれど彼女は逃がさずに。

「ちよ、ちよ………馬鹿ッ！ 正孝ッ！」

「あは、ほら。ボクってば来る者は拒まずですし？ ほら、行こ」

日頃の行いかすれ違ふ皆は、喚く女子生徒を抱いて脱出する俺を快く送り出した。

教室の扉を軽く開いて、あわただしく再び練習に励み始める生徒を置いて。

彼女の音の余韻が残る空の下に行こう。

その日、その後温かい誰かと見上げたその空は。

妙に高くて綺麗で暖かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7656z/>

---

凡才は天使の翼で高く舞う

2011年12月25日00時51分発行